

えに従つたものであるが、本種と *O. ochotensis* (Rupr.) J. Ag., (シノブバノコギリヒバ一岡村) の本質的差異を認識することが困難で、後者は本種の幅狭き形にすぎず、両者は中間型によつて連続しているものと考えられる。これら兩種の type specimens が同一種なりと断定されれば、學名としては priority から *O. ochotensis* が用いらるべきである。

10. フサノコギリヒバ (山田幸男博士命名) も樺太各地に分布し、千島にも知られ、又筆者の手にある標本によれば北海道の利尻島まで南下している。體が殆ど圓柱狀である點 *Odonthalia* 屬中特異で *Rhodomela* 屬に類するが、枝端に毛狀葉 trichoblast を全く缺くことが屬を決定する特徴の一である。雌器を有する小枝の頂には毛狀葉類似的構造が見られるが、眞の毛狀葉とは異なる。本種の type locality は Turner (1808) によれば Port Trinidad, California であるが、本種が果して Washington 州以南に分布するかどうか疑わしい。北太平洋以外では、Hudson 灣の南東部から報告されたのみである。

○林檎(ワリngo)渡來の年代 (榎 山 泰 一) Y. MOMIYAMA: The date of introduction to Japan of *Malus pumila* var. *dulcissima*.

林檎(ワリngo)が舊大陸からわが國に渡來したのはいつのことか判然しないが、本草和名、倭名抄このかた室町時代に至る辭書類や鎌倉室町時代のいはゆる往來ものなどにその名が見えるから、古くその木が渡つてゐたことはほぼ想像し得るのである。しかし名稱のみが掲げてあるこれらの文献は、林檎の存在を證すべき記録としてはいささかものたりない嫌があり、桃山江戸時代以前の林檎の歴史は臆ろげにしかわからなかつた。ところで古名録に引用してある藤原定家の日乗なる明月記の記事はややこの不足を補ふに足るものがあると思はれる。それは同記の嘉禎元年(○文曆二年 1235)閏六月八日己亥の條に、朝陽出雲、風猛烈、巳時雨降、庭樹林檎 入籠(進脱カ)皇嘉門院(○以下割註)北白川殿(國書刊行會本明月記)とある一節であつて、この記事によると林檎は當時栽培されてゐたことが明らかである。尤もここにいふところの「林檎」は、わが國に渡來した林檎屬中のいつれの種類と見ることも可能である。しかし、その中で最も食用に適ひ且つ林檎の漢名を有するものはワリngoなのであるから、やはりその種類をワリngoと解しておくのがおだやかかと考へる。さすればワリngoは鎌倉初期以前に渡來してゐたことになつて、その渡來年代の下限を桃山時代からさかのぼらせ得ると同時に、平安朝時代にワリngoが存在した可能性も十分、考えられて來るのである。定家は、にはか雨のあつた晩夏の一、自分の庭に栽ゑてある木から、半青半紅に熟し初めた林檎を探つて、青竹の色もすがしい籠に入れて、これを皇嘉門院にまゐらせたのであるが、こゝに皇嘉門院といふのはどなたのことであらうか。手近かな本を見ても當年、皇嘉門院の院號を有せられた女院は在はさないやうであつて、これは或は原本に安嘉門院とあつたのを後人が寫しひがめたものかとも思はれるが、その詮索は暫く措くとして、日記の日なみを數へると、その日は太陽曆の七月二十四日になるやうで、それはちやうどワリngoの熟し初める頃に當つてゐる。